

## 伊勢神宮雑記

理事・京都大学名誉教授 川崎 清

私が始めて伊勢神宮を見たのは建築学科の学生の時、当時京都大学で日本建築史を教えて頂き、建築研究協会の創始者のお一人であった故村田治郎先生に引率されて見学に行ったときであった。伊勢神宮は式年遷宮制により20年毎の建て替えが定められていたが、戦乱や動乱などで正確に続けられたわけではない。この時も戦後の混乱期で前の遷宮より4年遅れて行われた59回目の式年遷宮【1958年】が終わり、新しい社殿が出来たばかりであったので目映いばかりの美しさであったと記憶している。その後大江町のまちづくりに関わった折に、丹後の元伊勢と呼ばれる大江町の内宮・外宮や宮津の籠神社【このじんじゃ】などを訪れる機会があり、元伊勢とは何かなど、伊勢神宮の成立の経緯やあの美しさは何故なのかなどに興味を抱いてきた。

### 口彷徨い続けた伊勢神宮

日本書紀・崇神6年の条によれば、天照大神【あまてらすおおみかみ】と倭大國魂神【やまとおおくにたまのかみー出雲先住系の祖神】の二神を大和朝廷の宮殿にお祀りしていたところ国内に疫病が流行した。両神共に住むことを好まず、よって天照大神を大和の笠縫邑に、大國魂を三輪山に祀ったところ漸く疫病は終息した。大國魂とは大物主即ち大國主の靈神であり、意富多々泥子【おおたたねこ】という出雲系の司祭がついておさまったと言われる。その後、天照大神は笠縫邑にも落ち着けず、倭姫命【やまとひめのみこと】の捧持で丹波、近江、伊賀、美濃など20数ヶ所を巡り、数十年を費やし、ようやく伊勢に鎮座した。これは大和やその周辺が先住民族の地元信仰で占められていたため、あとから入った外来の天皇家勢力の移動に対する地元抵抗が有り、容易に受け入れられなかった経緯を表していると言われる。伊勢に至る途中で鎮座したところは元伊勢と呼ばれ、元伊勢宮などとしてその痕跡を刻んでいる。宮津の籠神社も元伊勢宮のひとつであり、その成立の始めの頃真名井原の吉佐宮に、祭神であった豊受大神が大和笠縫邑から遷られた天照大神を一時的に受け入れ、4年間ほど共祭されたなどの記録がある。天照大神が伊勢の内宮に鎮座したのは書紀によれば垂仁天皇丁巳年【297年?】の冬とあり、3世紀末のことになる。豊受大神が伊勢に呼び寄せられ外宮として鎮座したのは雄略天皇の戊午年【478年】とあるから180年程の時差がある。この時差はなにを意味するのか。丹後の古代は出雲系であっ

たと言う説もあることを考えると大和と出雲が和解し安定するためにかかった年月であり、国譲りが真に成立したのはこの頃のことではなかったか。そして飛鳥時代に天武天皇によって式年遷宮の制が定められ【604年】持統天皇によって第1回遷宮が行われた【690年】とあるので、伊勢神宮が名実ともに成立したのは7世紀のことであった。

## □伊勢神宮のルーツ

古代の神殿形式は弥生時代の高床神殿倉庫に由来しているといわれている。しかし、高床や屋根の上の千木・鯉木などの原型は中国雲南省とミャンマー国境に住む少数民族の瓦【ワ】族などの民家にもある。

これらの民族の集落の結界にも鳥居や注連縄などが使われ、我が国の古代からの風習や伝統と共通するところがある。これらの民族文化はもと長江流域の稲作民族の流

れを汲むものであったが、中国春秋戦国の末期に、南下した礎、秦などの漢民族に追われた呉・越などの江南の軍団・遺民などが長江上流、東南アジア、日本を含む周辺に四散した結果である。これらの動乱は我国の弥生人の登場にも関係がある。屋根の形状などは弥生時代の建築がこれらの系譜をうけていることを検証する材料の一つである。

【参照；弥生文化の源流考 鳥居憲三郎、若林弘子】

東アジアの流れを受けて始まった日本建築は弥生時代から古墳時代を通じて次第に日本固有の木造建築に進化した。古墳時代は3世紀半ばから7世紀末までの400年間を指して言われ、九州南部から東北地方まで前方後円墳がつくり続けられた時代であり、家形埴輪にその跡付けがみられる。魏志倭人伝に登場する卑弥呼【景初3年、239年】の頃から倭国にヤマト王権が成立し、王権が強化統一された時代で、天照大神が大和朝廷の祖神として祀られ、その後、伊勢へ移り、伊勢神宮の内宮・外宮が成立する間のできごとである。伊勢は大和朝廷が西日本を制し、東への足がかりを固める大きな役割を果たす重要な位置ではなかったかと



滄源県班老村の民家  
弥生文化の源流考 鳥居憲三郎他



今城塚古墳の大阪府高槻市 6世紀前半  
継体天皇陵出土の神殿埴輪

思われる。

そして7世紀に伊勢神宮が完成度の高い日本建築として出現した。伊勢神宮は初期日本建築の完成形を示す象徴的な存在である。

### □伊勢神宮とパルテノン

伊勢神宮は第一回式年遷宮より2013年で62回を数えるが、最初からこの美しさであったのであろうか。直感ではあるが、遷宮の過程で工人達の腕による微妙な修正が繰り返し行われなかったといえるだろうか。

「建築とは何か」については、BC 1世紀ローマの建築家ヴィトルヴィウスが建築十書によって規定した三つの建築原理を満たす事は広く了解されている。

伊勢神宮は、用【utilitas】、強【firmitas】、美【venustas】の三原則を満たしていると考えられるが、中でも建築美の認識が重要で、伊勢神宮はそれまでの建築に比べて飛躍的に美的価値を内包している。



伊勢内宮



アテネ パルテノン

一方、西洋古典を代表するパルテノン神殿もその比例寸法とヒューマンスケールの故に比類無き美しさをもっていると言われるが、私は最初にこれを見たとき、2400年以上の時を経た風化がこれに加わって廃墟としてのロマンと美しさを加わっているように思われた。

この二つの建築は時間の関わり方に違いはあるが、建築の美しさは空間や形だけでなく時間が微妙に荷担していると思われてならない。